

トキと暮す佐渡の自然再生と地域再生

佐渡市 農林水産課 農業政策室 トキ政策係 係長 村岡 直



写真提供 宇治玲子様

1. はじめに

この写真は、昭和42年、新潟県教育委員会よりトキ保護観察の委任を受けた宇治金太郎氏と日本産で最後まで生存していたトキのキンちゃんの写真です。当時、国内にトキは佐渡と能登半島にわずかに生存するのみとなっていました。宇治さんは手記にこのように書かれています。

『私は保護観察の依頼を受けたときから、トキに近づき仲良くなるためにはお互いの信頼関係が大切と思い、帽子一つも変えないで、毎日同じ服装でキンちゃん接しました。トキに「この人は安全なのだ」と思わせようと細かく気を配りました。このためには、自分が一步高い所に立って、トキをどうしよう、こうしようなどと思っては失敗したと思います。相手の気持ちをいち早く察知し求めていることを代行してやらなければなりません。自分は鳥の下男なのだと思うほどでなければ、とても信頼感など生まれません。』

そうこうしているうちに捕獲計画は進められ、1月23日捕獲のために網を仕掛けました。私が網のそばでエサを持ち、キンちゃんが網に入るのを待ったのですがひざの上にとまってエサをもらい、地上には降りないまま飛び立ってしまいました。網ではどうしても捕獲することができないということで、最終的には、私が自分の手で捕獲するよう、県から委嘱されました。

3月15日、捕獲の日です。朝から待っていましたがキンちゃんの姿はどこにも見当たりませんでした。方々を捜して、やっと豊田地区の岩野にあるケヤキにとまっているのをみつけました。キンちゃんは何か異様な気配を感じたらしく、なかなか降りてきませんでしたが、4時過ぎにようやく降

りてきました。しばらく一緒に遊んでいましたが、夕暮れ時になってネグラに帰る時間が迫り捕獲しなければなりません。この手でキンちゃんを捕獲する決意を固めました。この時の気持ちを一生忘れないでしょう。責任を果たした安心感とキンちゃんに対して世界一の裏切り者になってしまった、という気持ちが入り混じりしめつけられる思いでした。

捕獲したキンちゃんには、回りを見て興奮しないように黒布をかけ、新穂村公民館の小屋まで運び、そこに一晩泊めて、翌朝8時に新潟県トキ保護センターに運びました。関係者には「センターまで運んでくれないだろうか」といわれましたが、1日も早く飼育担当者に慣れてほしいと思い「今晩でお別れだ。幸福に暮らせよ」と別れを告げました。これで、私とキンちゃんの130日間、延べ604時間のお付き合いは終わりました。』(原文)

この手記の後、1981年には、キンちゃんに続き佐渡に最後まで残っていた野生5羽のトキの一斉捕獲により、トキは自然界で一旦絶滅となった。

佐渡では宇治金太郎さんをはじめ、佐藤春雄さん、高野高治さん、近辻宏婦さんら多くの方々トキ保護に携わってきた歴史がある。

また、現在はトキ保護から野生復帰とステージを変え継続している。携わっている方々は、自分の人生をかけ活動されている。

私自身、佐藤春雄先生には大変お世話になった。講演をお願いにご自宅に伺った際には、お茶菓子を御馳走になりながら、トキを観察しに山中を巡った話を昔撮影したネガなど見ながら伺った。私は仕事としてトキに携わっているが、佐藤先生からトキ保護のバトンを受け取ったように感じている。このバトンを次の世代に渡すことができれば幸いである。

トキには多くの人を引き付ける不思議な魅力がある。

2. トキ野生復帰環境再生ビジョン

トキは朱鷺色とよばれるオレンジピンクの羽を持つ美しい鳥で、1981年に、一旦、自然界で絶滅した。江戸時代までは国内の多くの地域で見られたが、明治時代に入り、狩猟が民間に許可され、また、農薬の使用により餌となるドジョウ等の水

生生物の減少が、トキの野生絶滅の要因とされている。環境省は、最後まで佐渡に生息したトキ5羽を捕獲し、人工繁殖にきりかえた。トキ保護センターの専門家の方が長きにわたっての努力が行われた。光明が見えたのが、1999年、中国よりご寄贈いただいた2羽のトキから最初のヒナの「ユウユウ」の誕生である。最後の野生トキ捕獲より人工繁殖成功までに実に18年経過している。その後は順調に繁殖が成功し、羽数は100羽近くまで増えた。羽数の増加を受け、環境省は2003年にトキ野生復帰を目標としたトキ環境再生ビジョンを作成した。ここで特出すべき点は、トキの再導入にあたり、自然再生とともに地域再生も目標としている点である。

『トキ野生復帰環境再生ビジョン』の要旨は次の通りである。

I トキの野生復帰の目標について

トキ野生復帰にあたって、トキの野生復帰エリアである小佐渡東部地域に「どれだけの個体数があれば、トキの絶滅を回避できるか」を、最小持続可能個体数(MVP, minimum viable population)等により分析した上で、次のとおり野生復帰の目標を定めた。

【目標】およそ10年後(2015年頃)に小佐渡東部に60羽のトキを定着させる。

この目標の実現のためには、次の2項目の実施が必要である。

- ①「トキの個体の確保」のために「人工増殖及び野生順化」を進めること。
- ②「トキが生息できる環境づくり」のために、少なくとも60羽のトキが定着できる自然環境づくり及び「社会環境づくり」を進めること。

II 「トキの個体の確保」について

(1) トキの人工増殖の推進

トキの個体の安定的な確保のため、佐渡トキ保護センターにおいて遺伝的系統管理に配慮しつつ、個体の人工増殖及び母集団の保存を行う。

(2) トキ野生順化施設の整備と順化訓練の実施

小佐渡東部地域の薄倉沢側薄倉沢川上流部にトキ野生順化施設を整備し、飼育下のトキに野生下での生存に必要な能力(採餌、繁殖、飛行、集団生活等)の獲得訓練を行った上で、野生復帰を進める。

III 「トキが生息できる自然環境づくり」の目標について

1. 農地での取組

【目標】

- ①水田や水路には、7～8cmのドジョウが1m²に1匹以上生息する。

- ②水田や湿地では、ヤマアカガエルの成体が10m²に1匹生息する、あるいは早春に1haにつき15個程度の卵塊が見られる。

- ③畦畔や周辺の草地には、1m²に大小合わせて2～3匹のバッタが生息する。

【目標達成のために実践すべきこと】

<中山間地域>

- ・ドジョウ、カエル類などの水生生物の生息環境となる棚田の復田
- ・陸生昆虫類(バッタ・イナゴ類など)の生息環境としての草地の整備

<平場地域>

- ・休耕田のビオトープ化
- ・耕作田、用排水路の改良

2. 森林での取組

【目標】

- ①アカマツ・コナラなどの高木の保全。
- ②営巣に適した高木から500m以内に餌場がある。
- ③沢にはサワガニが1m²に大小合わせて2～3匹生息する。

【目標達成のために実践すべきこと】

- ・サワガニの生息環境としての健全な沢環境の整備
- ・営巣地づくり・ねぐらづくり

【トキの生息環境整備のための森林管理のカテゴリー区分の提案】

- I. 生息地周辺の放棄里山林(広葉樹林)の成長を促進するための択抜施業(コナラ・クリ類の萌芽密度コントロール)
- II. 生息地周辺の放棄スギ人工林の健全性を保つため(地滑り・土砂流出防止)のための間伐施業
- III. 棚田再生のために、谷地に侵入した樹木を排除する除伐施業
- IV. 特定の営巣木の成長を促進し、トキの侵入スペースを確保するための除伐施業
- IV. 「トキが生息できる地域社会づくり」の目標について

1. 「地域社会づくり」として行われた保全活動と協働事業

- 小佐渡東部の12地区において、トキの野生復帰をめざした地域社会づくりとして、ボランティア活動による餌場環境整備、環境保全型農業の模索、集落文化の見直し作業が実施された。

- 「共生と循環の地域社会づくり」を実現させるためには、新たな協働事業の創設が必要です。すなわち、協働の軸を明確に定め、異なる主体同士が、連携するシステムと場を持つ、新たな協働の場とシステムを構築すること重要である。

2. 協働事業における重点事項
(協働を創造する10のしくみ)
- トキを軸とした島づくり協議会の設置と運営(各主体間の協働と調整)
- 1) トキを軸とした島づくりに関する情報の集約と発信事業(情報センター機能)
 - 2) トキ博士をめざす資格制度、環境教育プログラムの開発事業(社会教育)
 - 3) トキを軸とした総合的な学習の時間の支援(学校教育)
 - 4) 地域社会活性化のための研究旅行の誘致と連携(大学)
 - 5) 餌場環境・営巣環境整備のためのボランティア計画の立案と実践
(ビオトープづくり・森林整備)
 - 6) トキと人に優しい環境保全型農業との連携活動(農業)
 - 7) トキを軸とした地場産品の開発と販売支援事業(産品)
 - 8) トキツーリズム計画立案と旅行業者との連携活動(観光)
 - 9) トキ基金の普及と運営窓口の設置、トキの森公園環境協力費による会館事業の実施
 - 10) 全国レベルの情報交流のための先進地交流会議「自然共生サミット(仮称)」の企画と実施



佐渡市民撮影

3. 自然再生と地域再生

環境再生ビジョンにより佐渡市は一つの目標を定めた。

「人とトキが共生できる社会づくり」であった。トキが生存できる環境を整備し、環境を整備することが佐渡の経済を活性化し、地域の方々が生き活きと生活できるようになる、環境と経済の好循環を、佐渡市は目指した。

国際自然保護連合の主席研究員 Jeffrey A. McNeely さんは、このような言葉をおっしゃっている。

『「自然保護」はたいていの場合、社会の現実的なニーズとの関連性が極めて限定的な特殊分野と受け止められた場合、つまり焦点が「人間」ではなく「動物」に置かれた場合、失敗に終わってしまいます』

この考え方はトキ野生復帰の本質であると思う。トキ野生復帰を単に希少な鳥の保護活動とだけ考え、人間社会と切り離して、生息環境だけ整えても成功は難しい。なぜなら、トキは里山の鳥で人との関わりの中で生息しているからである。地域に住む人の理解が不可欠である。また、トキ生息環境整備にはお金が必要となる。トキのために、人の生活を後回しにして、お金を出し続けるのも難しい。

そこで、佐渡市が目指した街づくりは「経済と環境の好循環する社会の実現」である。

トキのための生息環境整備が、地域経済の活性化に繋がり、経済を潤し、地域の方々が豊かで充実した生活でき、そこで生まれた利益により、トキの生息環境整備を行う。こうして経済と環境が車の両輪のように回っていく持続可能な環境社会の実現が目指す姿である。

ここで、佐渡市の環境と経済の循環の取り組みを一つご紹介させていただこうと思う。

「朱鷺と暮らす郷づくり認証制度」である。

この制度は、トキの餌場となる水田を、生きもの豊かな田んぼとして整備し、そこで収穫されたお米を、ブランド米として消費者に販売する。販売代金の一部を、トキの生息環境整備に活用するという制度である。トキが最初に放鳥される前年より、この制度は始まっている。

認定基準は次のとおりとなる。

- ①「生きものを育む農法」により栽培。
- ②生きもの調査を年2回実施。
- ③農薬・化学肥料を減らして栽培。
- ④栽培者がエコファーマーの認定を受ける。

特徴となっている点は、①の「生きものを育む農法」と②の生きもの調査である。

生きものを育む農法は、「水田・水路での江の設置」「ふゆみずたんぼの実施」「魚道の設置」「ビオトープと水田の連結」の農法技術により栽培されている。佐渡の水田は、夏に水を抜く中干しを実施するが、その際にも、水生生物が生きていけるように「江」と呼ばれる深みに水を維持しておく。また、冬場にも田に水を張り、ドジョウ等の水生生物が越冬できるような「ふゆみずたんぼ」と呼ばれる取組を行う。一年を通じて生きものが生きていけるような田にしておく農法である。

こうした生物に配慮した農法のおかげかどうかはわからないが、2012年、新種のカエルが佐渡の平野で確認された。「サドガエル」と名付けられた。

また、実際に農家の方が、年に2回、自分の田んぼの生きもの調査をおこなう。自分の田んぼに、生きものが沢山いる事を実感してもらう。この事が消費者にお米を販売する際に、自信を持って、「生きものに溢れた田んぼのお米である」と言うことができる。この朱鷺と暮らす郷づくり認証制度の佐渡の取り組みについては、FAO（国際連合食糧機関）により後世に残すべき農業として、GIAHS（世界農業遺産）の認定を受けている。2011年6月北京で開催された「GIAHS国際フォーラム」において「トキと共生する佐渡の里山」が「能登の里山里海」と共に認定された。

国際連合という世界的機関によりこの認証制度が認められたことは地域の誇りとなった。

また、トキの餌場の観点からは、水田だけでなく河川、ビオトープ等での連続性を維持することで、水生生物が自由に行き来でき、一つの生息地に水が無くなっても、他の生息地に移り、水生生物が生き残ることができる。

水田、ビオトープ、河川の複合的な整備もおこなわれてきた。



出典「佐渡地域 多彩な生きものとの共生指針」

4. まとめ

2008年9月25日に第1回トキ放鳥がおこなわれた。27年ぶりに佐渡の大空に10羽のトキが舞った。

現在まで14回の放鳥が行われた。2016年には40年ぶりに、親鳥が自然界生まれの純野生下ヒナが誕生し、無事に巣立ちしている。

今では佐渡の自然に約200羽のトキが生息している。大勢の方々の長い年月の努力がようやく実を結びかけている。

しかし、トキの羽数が増えるにつれて、餌場確保やトキが水田の稲の苗を踏む被害の増加など、新たな課題も出てきている。

「トキ野生復帰は次のステージに移った。けれど、まだまだ、先は長い。」という実感である。

「トキをなぜ保護するのですか？」

修学旅行で佐渡に来た小学生にトキ保護活動について説明をしていると、この質問を受けることがある。この回答がなかなか難しい。大人に対してであれば生物多様性の意義等で答えることができるが、子どもへの回答は短い言葉で本質をとらえた、手のひらサイズの答でなければならない。

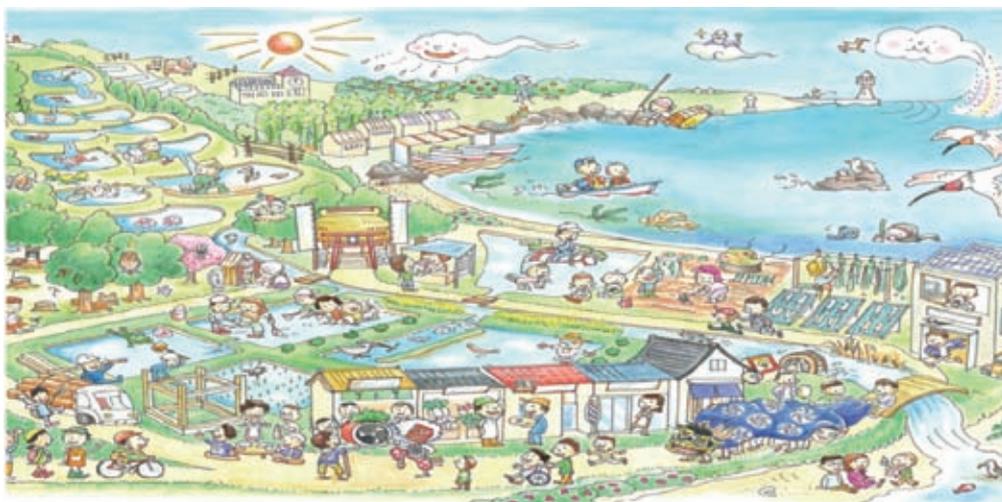
文章の結びに、この子ども達の質問にたいする回答をして終わりたいと思います。

私は、子どもにトキ野生復帰を説明する際に、次の絵を見せてこう説明しています。

「この絵が佐渡市が求めている街です。」

「トキという美しい羽をもつ鳥は、人のせい一旦絶滅しました。しかし、現在、多くの方が努力して野生に戻す取組をおこなっています。その際、人が失った環境を再現するだけでなく、地域の方が生き活きと生活できる社会の実現も目指しています。」

「佐渡市は、この絵のように人とトキが共生できる社会を目指しています。」



出典「トキと暮らす島 生物多様性佐渡戦略」